

学校に通報も 非着用に激高する「#マスク警察」の心理とは

毎日新聞 2020年6月29日 14時04分 (最終更新 7月3日 11時33分)

山内真弓 宇多川はるか



マスクを着けて登校する子どもたち (イメージ) = ゲッティ

新型コロナウイルスを警戒するあまり、マスクをしていない他人を攻撃してしまう人がいる。ソーシャル・ネットワーキング・サービス (SNS) 上では、自粛要請に従わない人や店に嫌がらせをしたり通報したりする「自粛警察」をもじって「マスク警察」という言葉が飛び交う。感染予防は大事だが、感染リスクの低い状況の時までマスクを強要する社会に息苦しさはないか。記者自身の体験を交えて考えてみた。

【山内真弓、宇多川はるか/統合デジタル取材センター】

1歳児に「マスクしなきゃダメでしょ」

それは5月下旬、平日の夕方のことだった。在宅仕事が一段落した記者 (宇多川) は、1歳の娘をベビーカーに乗せて散歩に出た。駅近くの川沿いを歩いていると、向かい側から歩いてきた年配の女性に、すれ違いざまに大声で言われた。

「お母さん！ 赤ちゃん、マスクしなきゃダメでしょ！」。笑顔でふざけている雰囲気ではなく、本気で怒っている表情に見えた。「え……」。とっさに何も言えず、通り過ぎていく相手の顔を見つめることしかできなかった。

その時、記者はマスクをしていたが、1歳児にマスクを着ける発想はなかった。着けようとしても、1秒ももたずに嫌がるだろう。散歩していた道が雑踏というわけでもなく、一定の距離を取って人が行き交える程度の広さはある。「1歳児がマスクをしていないと怒られる『マスク社会』とは……」と考え、暗い気持ちで家路についた。

「生徒がマスクを着けていない」 学校に通報も

そんな体験をしたのは記者だけではない。ツイッター上には「#マスク警察」というハッシュタグも現れ、体験談の投稿が相次いでいる。

教師とみられる人のアカウントでは、登校してきた小学1年生との会話が紹介されている。泣きながら登校してきた女子児童。よく見ると、手で口を押さえている。「どうしたの？ 気分悪い？」と声をかけた教師に、児童は首を横に振り「マスクを忘れちゃった」と小さな声で答えた。聞くと、通学中に「男の人にマスク着けなさい！と怒鳴られて怖かった」という。

この投稿は24日時点で9万以上リツイートされ、返信欄にも意見が殺到している。自転車通学をしているという生徒は「地域から『マスクを外している生徒がいる』とクレームが学校に入った」といい、それ以来、汗などでベタベタになっても通学中ずっとマスクをしているとの体験を寄せた。他にも「『感染防止目的』よりも『着けていないと責められるから』という雰囲気になっていることに違和感」という声や、「マスクはしたほうが良い。(でも)怒鳴るのは良くない」「大声で会話をする大人だけがマスクをすればいい」などの意見が寄せられた。

無理なマスク着用は、熱中症の危険

マスク着用は本来、せきやくしゃみ、会話などに伴う飛沫（ひまつ）感染を予防するのが主な目的だ。厚生労働省は5月に公表した感染拡大を防ぐための「新しい生活様式」の中で、他者との距離の確保や手洗いと並ぶ「三つの基本」として、マスク着用を求めている。ウイルスの付いた手でついつい鼻や口をさわってしまうリスクを避ける意味でも、外出時にマスクを着けるのが望ましいのは論をまたない。



マスク＝Getty (写真はイメージです)

一方で、気温が上昇するにつれて、怖いのは熱中症だ。日本小児科医会は、窒息や熱中症の危険があることから「2歳未満のマスクは危険。3歳以上も強要をしないことが重要」と強く警告している。こうしたリスクを反映して、厚労省は6月19日に「新しい生活様式」の記述を改訂。マスクを着ける条件を「人との間隔が十分に取れない場合」と明記するとともに「夏場は熱中症に十分注意する」とのただし書きを付け加えた。

熱中症に十分注意する」とのただし書きを付け加えた。

文部科学省も6月16日に学校向けマニュアルを改訂し、「暑さで息苦しい時などは、マスクを外したり、一時的に片耳だけかけて呼吸したりするなど、自分の判断で対応する」「十分な距離を確保できる場合、マスクは必要ない」などと、熱中症対策を重視した柔軟な対応を取るよう求めた。公衆衛生学が専門の岩室紳也医師は「飛沫は2メートルしか飛ばないので、対面でせきをかけられるようなことでもない限り、感染することはない。大きな声を出すと飛沫は出るが、真っすぐしか飛ばない」と指摘し、授業中、教師と2メートル以上離れている場合や、他の人と距離を空けて登下校するような場合には、マスクを着ける必要性はないとの考えを示す。

「マスクをしてほしい」との思いは理解 「正義感の暴走」には苦言も

専門家は、マスクを着用しない人に批判的な社会の空気をどうみるのだろうか。緊急時の社会心理に詳しい関谷直也・東京大大学院情報学環准教授は、「マスクの問題に限らず、（自粛生活が続き）不安による集団ヒステリーが社会規模で広がってきているともいうべき状況」と分析する。

一方で、政府や専門家会議、医療関係者、WHOが感染予防としてマスク着用を呼びかけていることを踏まえ「攻撃的なのは問題だが、『マスクをしてほしい』という思いは、過剰ではないのでは。自粛警察と並列で語られることや、マスク警察という言葉そのものにも違和感がある」との見方を示す。「誰もが『保菌者かもしれない』と意識して行動することが、感染拡大を防ぐ。マスクをすべき時にしていない人もいる。小学校でクラスター感染したという新しい知見もある。1人で出歩けないくらい小さな子どもは別としても、今は規範として『マスクをする』ことが推奨されているのであって、高圧的にマスクが強要されている、それが問題だ、とするのは違うのではないか」という考えだ。

近現代史研究者の辻田真佐憲さんは「緊急事態宣言は解除されたが、非常時ムードは続いている。人々の日常の感覚がまひしており、普段だったら抑えられている行動が表に出てしまう」と指摘した上で、他人を怒鳴りつけるような行動をする人については、自粛警察と同様に「正義感の暴走が起き、他人を嫉妬したり、見下したりしたい気持ちを持つ人が『マスク』を大義名分に攻撃している」と厳しい見方を示す。

辻田さんによると、日本ではこういった現象が繰り返されてきた。明治天皇が崩御した後には、喪章を服に付けていないと町中で「愛国心がないのか」と絡まれることもあったという。「日本社会では、非常時に同調圧力がより強くなる。



マスクは、人によっては着けると息苦しくなる人、体調が悪くなる人もいる。（他人の置かれた状況への）想像力が必要だ」と話す。

近現代史研究者の辻田真佐憲さん＝東京都千代田区で2017年6月14日、渡部直樹撮影

毎日新聞のニュースサイトに掲載の記事・写真・図表など無断転載を禁止します。著作権は毎日新聞社またはその情報提供者に属します。画像データは（株）フォーカスシステムズの電子透かし「acuagraphy」により著作権情報を確認できるようになっています。

Copyright THE MAINICHI NEWSPAPERS. All rights reserved.